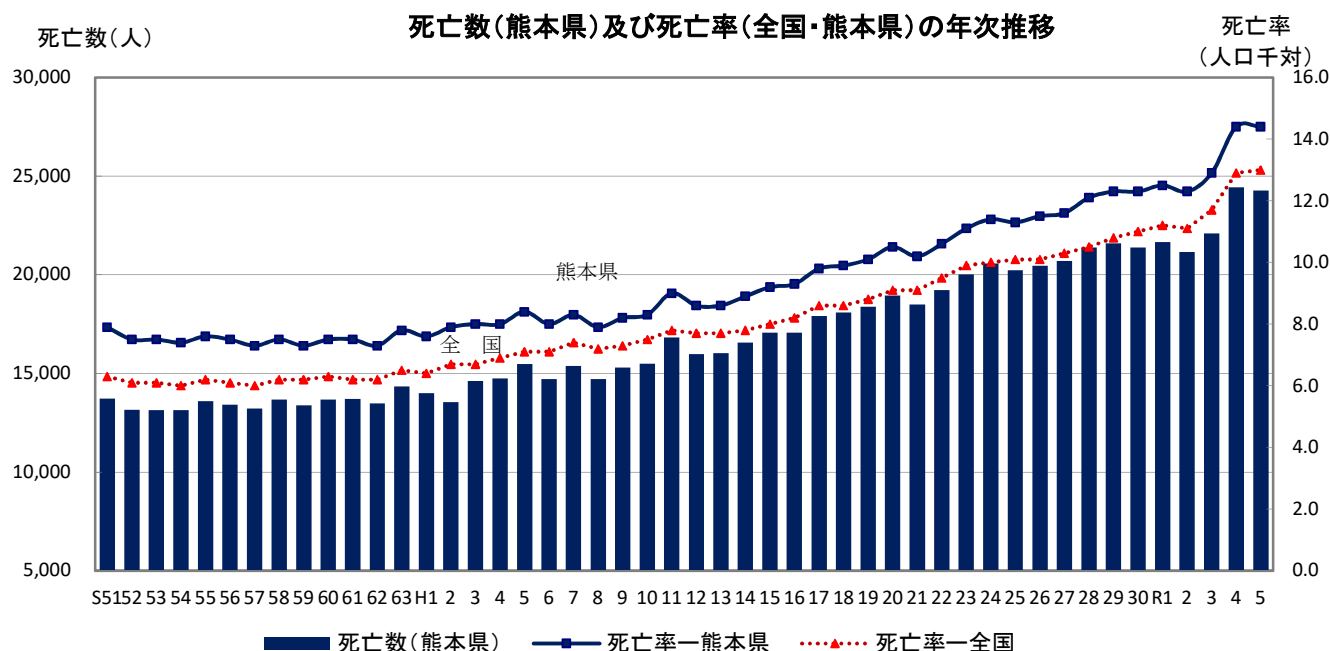


3. 死 亡

(1) 死亡数が、出生数を13,076人上回る

令和5年の本県の死亡数は24,265人で、死亡率（人口千対）は14.4で前年から横ばい。
また、全国の死亡率（人口千対）は13.0で、前年より0.1ポイント増加した。

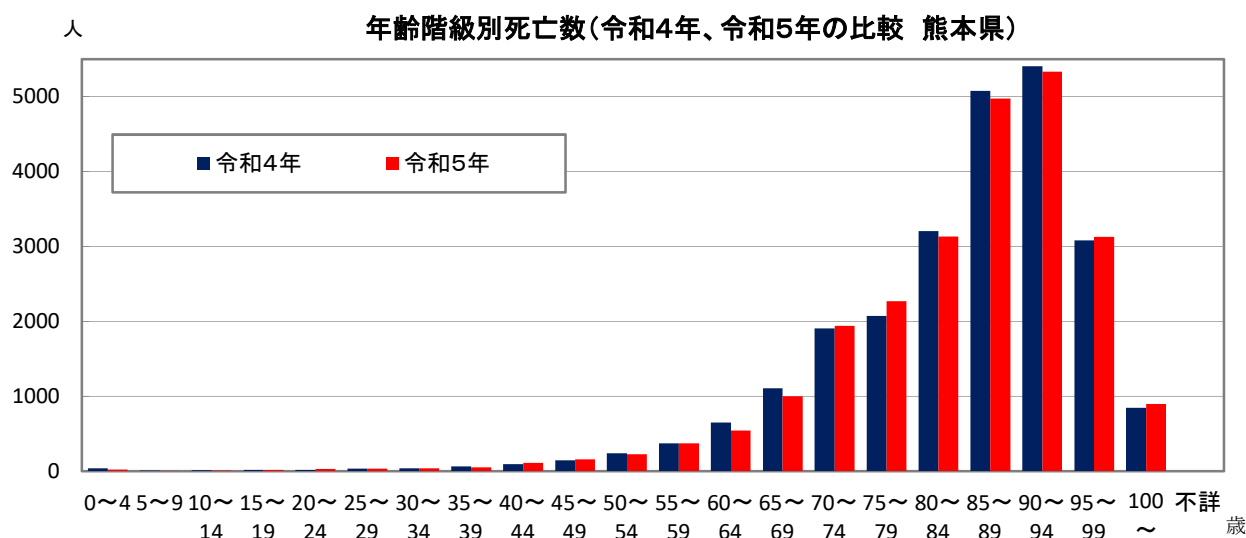


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(2) 令和5年の死亡数は、前年に比べ162人減少

本県の令和5年の死亡数は、前年より162人減少した。前年と比較すると、年齢階級により増減は様々だが、全体でみると1.5ポイントの増となっている。

また、最も死亡数の多い階級は、90～94歳の5,333人、次いで多い階級は85～89歳の4,972人であり、この2階級をあわせると、全体死亡数24,265人の42.5%を占めている。



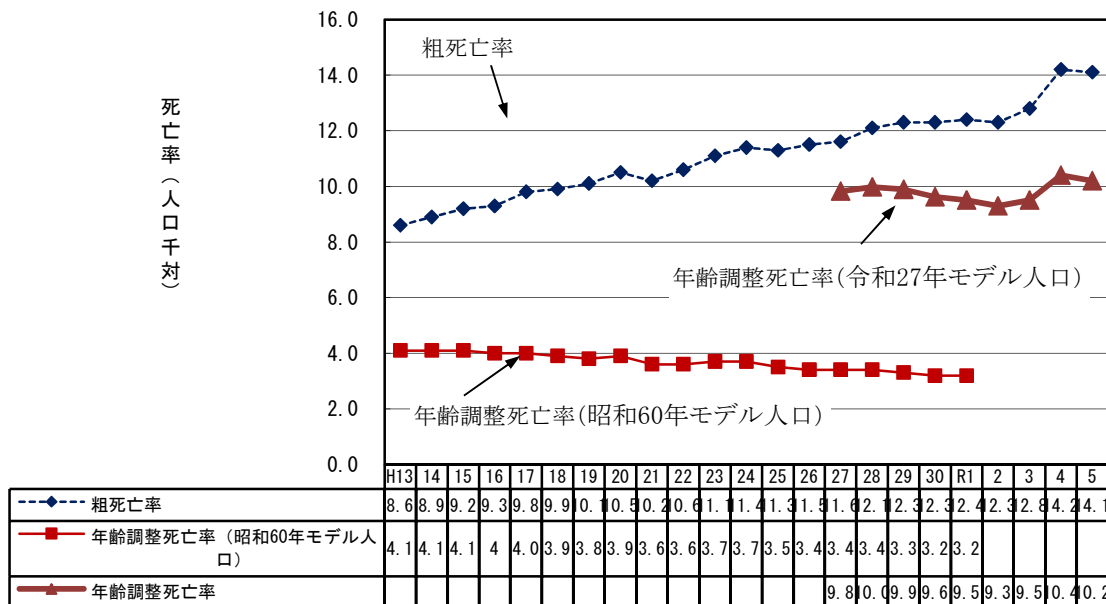
資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(3) 年齢調整死亡率は10.2（人口千対）

本県の令和5年の粗死亡率（人口千対）は、14.1で前年より0.1ポイント減少した。平成27年全国モデル人口を基準に人口構成を補正した令和5年の「年齢調整死亡率」は、前年より0.2ポイント減少し10.2だった。

※「年齢調整死亡率」の算出方法については、本書の巻末「用語等の説明」参照。

粗死亡率と年齢調整死亡率の推移（熊本県）



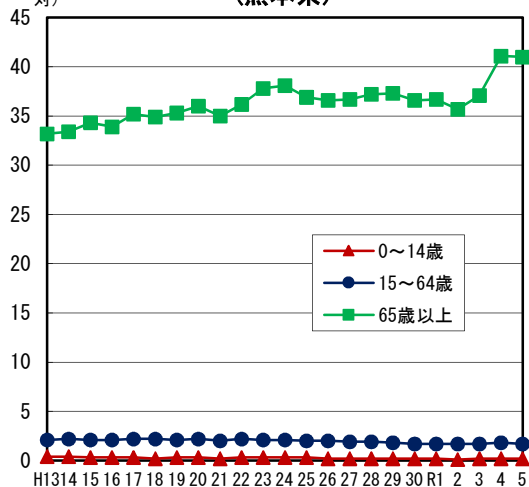
- 注）1）年齢調整死亡率の基準人口は、令和2年に昭和60年モデル人口から平成27年モデル人口に変更された。
 2）粗死亡率は、年齢調整死亡率と比較するために粗死亡率と表現したが、単に死亡率と呼んでいるものである。

資料）厚生労働省「人口動態統計」

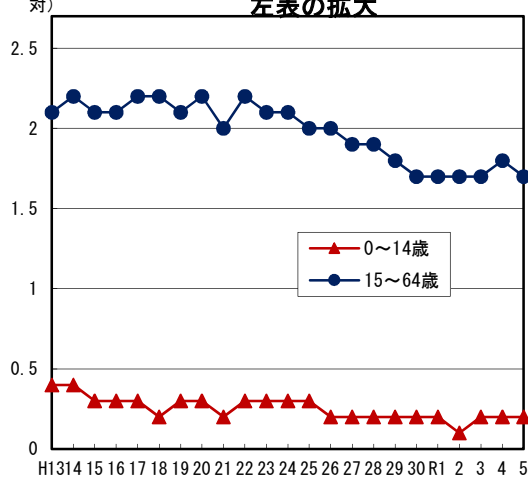
(4) 年齢3区分別死亡率は、15～64歳、65歳以上で0.1ポイントの減

死亡率（人口千対）の年次推移を年齢階級3区分別にみると、令和5年は0～14歳が0.2で横ばい、15～64歳が1.7で0.1ポイントの減、65歳以上が41.0で0.1ポイントの減であった。

年齢3区分別死亡率の推移（熊本県）



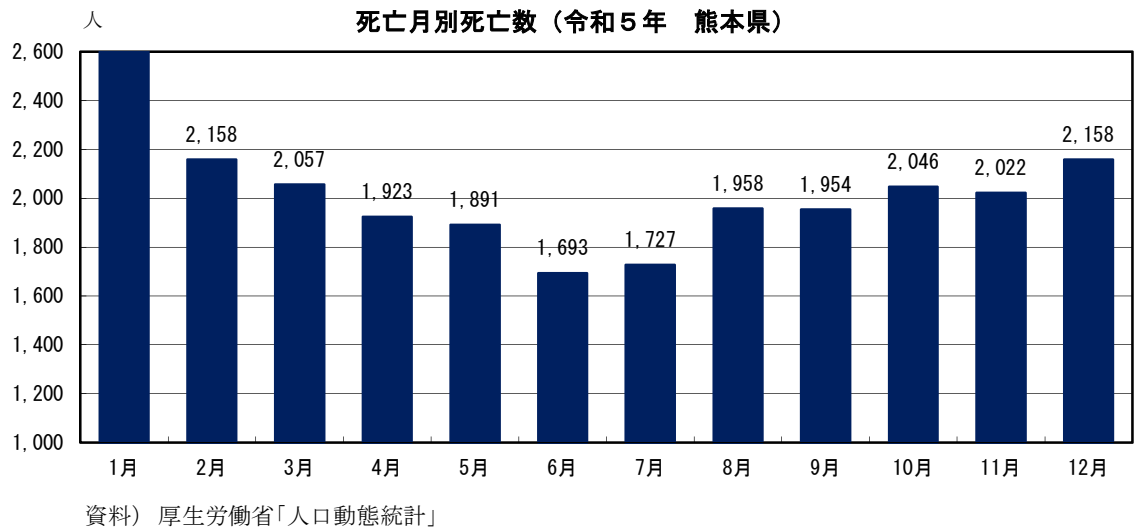
年齢3区分別死亡率の推移（65歳未満 熊本県）
左表の拡大



資料）厚生労働省「人口動態統計」

(5) 死亡数が多い冬期

死亡数を月別にみると、寒くなる12月から3月にかけて多くなっている。



(6) 全国より高い主な死因別の死亡率（人口10万対）

令和5年の主な死因別の死亡率（人口10万対）を全国値と比較すると、主な死因では自殺及び慢性閉塞性肺疾患を除き本県の方が高くなっている。

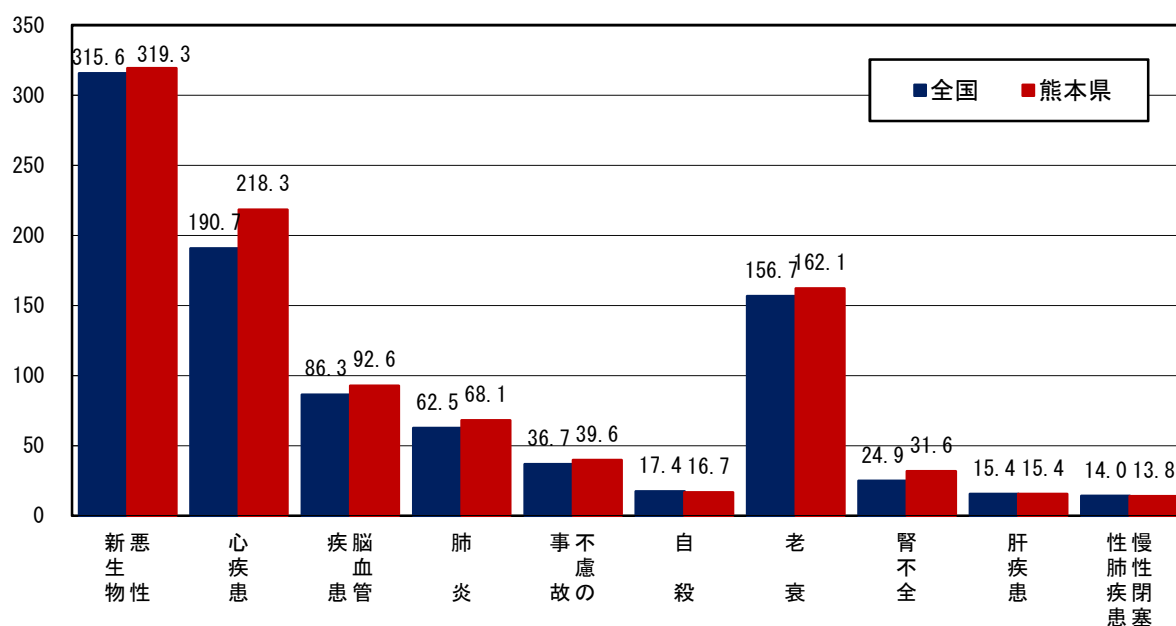
主な死因による死亡率（人口10万対）				熊本県と全国との比較			令和5年
死 因	熊本県 死亡数	熊本県 死亡率	全国順位 （降順）	全国 死亡率	全国1位 （降順）	全国47位 （降順）	
悪性新生物	5,380	319.3	33位	315.6	秋 田 県 437.5	沖 縄 県 235.9	
心疾患	3,678	218.3	19位	190.7	山 口 県 284.2	愛 知 県 130.8	
脳血管疾患	1,560	92.6	30位	86.3	秋 田 県 173.4	滋 賀 県 62.7	
肺炎	1,148	68.1	25位	62.5	青 森 県 110.0	沖 縄 県 38.0	
不慮の事故	668	39.6	28位	36.7	青 森 県 61.1	沖 縄 県 20.6	
自殺	281	16.7	29位	17.4	和 歌 山 県 21.8	鳥 取 県 14.3	
老衰	2,732	162.1	27位	156.7	山 形 県 263.3	福 岡 県 110.2	
腎不全	532	31.6	16位	24.9	高 知 県 45.2	神 奈 川 県 17.3	
慢性閉塞性肺疾患	233	13.8	36位	14.0	大 分 県 21.0	愛 知 県 9.8	
肝疾患	259	15.4	25位	15.4	沖 縄 県 28.6	滋 賀 県 11.1	

	熊本県	全国順位	全国	全国1位 （降順）	全国47位 （降順）
65歳以上人口の割合 （R03.10.1人口推計：総人口）	32.8%	23位	29.7%	秋 田 県 39.2%	東 京 都 23.6%

資料）厚生労働省「人口動態統計」

率
(人口10万対)

主要死因別粗死亡率の県と全国の比較（令和5年）

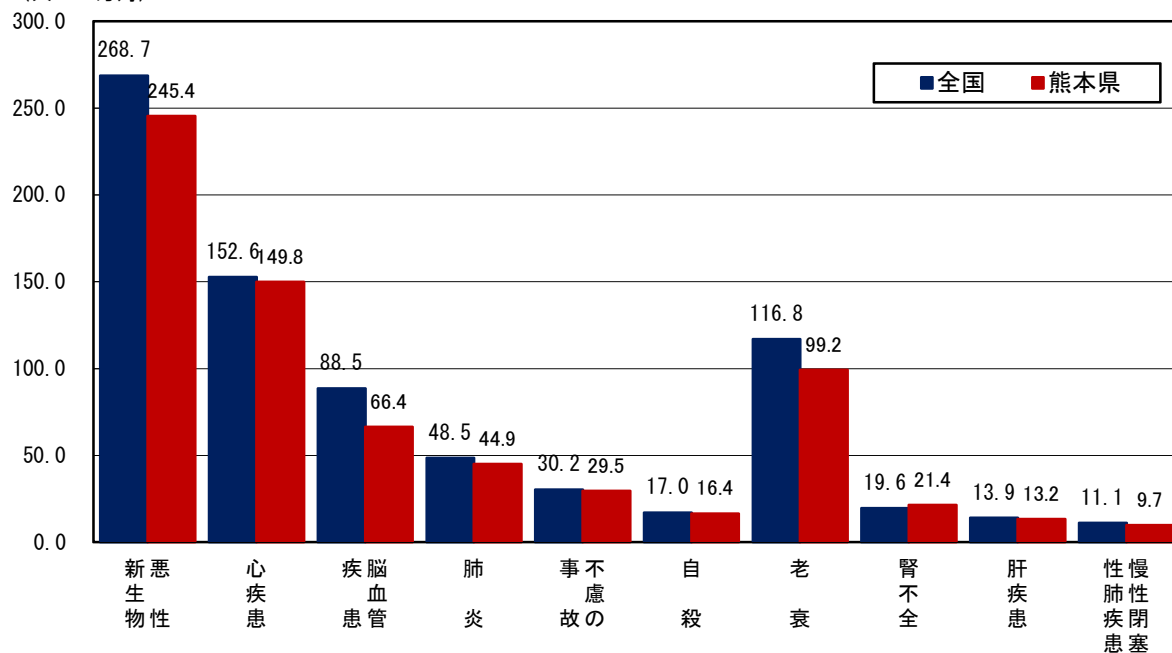


注) 粗死亡率は年齢調整死亡率と比較するために粗死亡率と表現したが、単に死亡率とよんでいるものである。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

率
(人口10万対)

主要死因別年齢調整死亡率の県と全国の比較（令和5年）



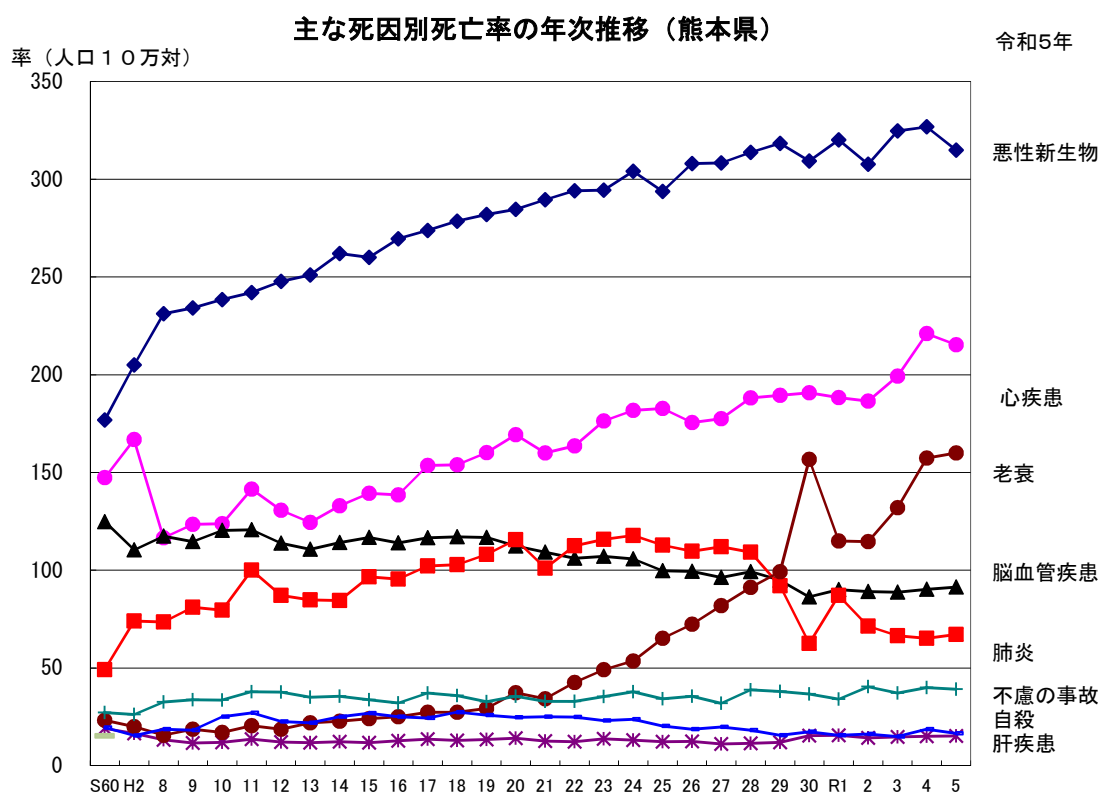
注) 年齢調整死亡率は、平成27年全国モデル人口を基準とした。

資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(7) 令和5年の主な死因別死亡率は、悪性新生物・心疾患が減少、脳血管疾患・肺炎・肝疾患・老衰が増加

令和5年の本県の主な死因別死亡についてみると、悪性新生物の死亡数が5,380人で、死亡率（人口10万対）は319.3であり、死亡総数の22.2%を占めて死因順位の第1位となっている。第2位は心疾患、第3位は老衰だった。

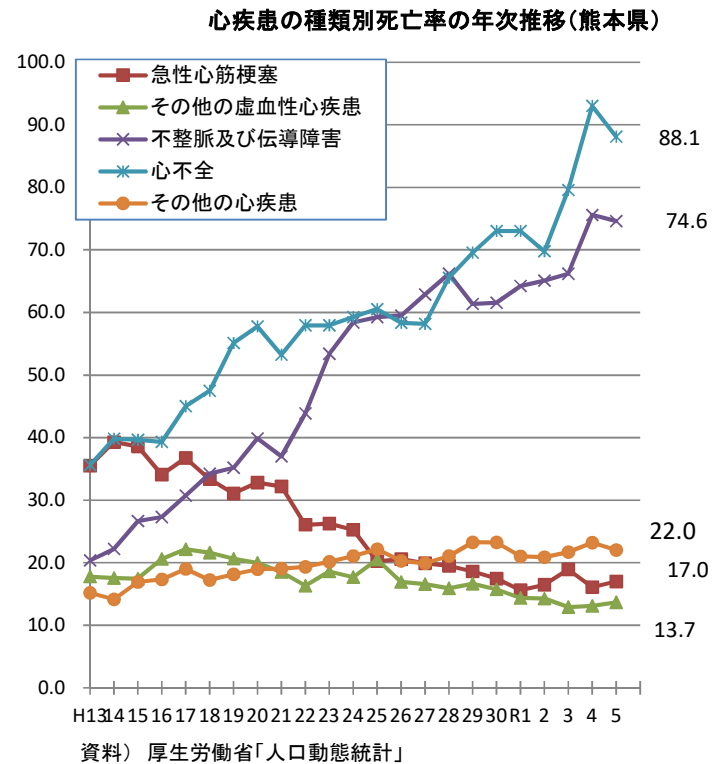
なお、平成6年から平成7年にかけての死因別死亡の急激な変化は、国際疾病分類の第10回修正（ICD-10）の影響によるものと考えられる。



注）平成7年から疾病分類が変更されたため、「肝疾患」は平成6年までは「慢性肝炎・肝硬変」
資料）厚生労働省「人口動態統計」

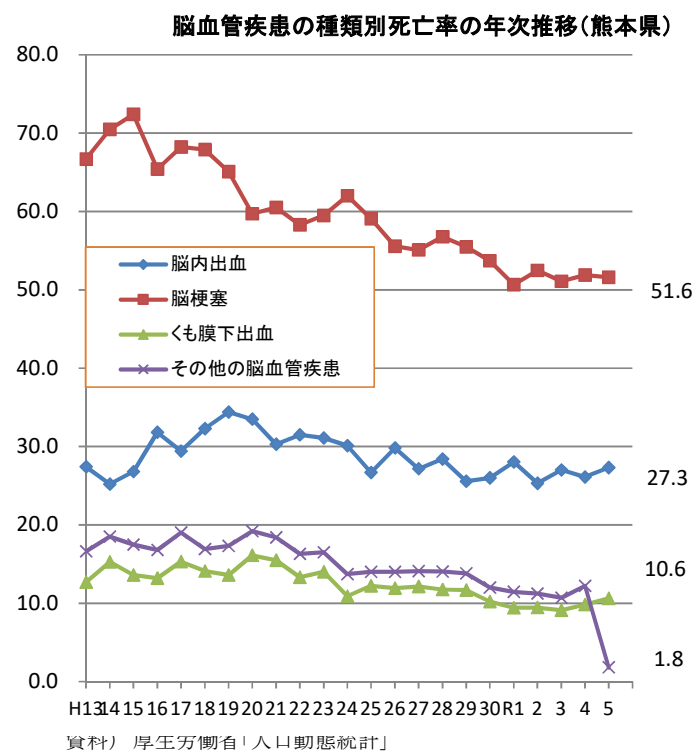
(8) 心不全が1位

本県の心疾患の種類別死亡率の年次推移をみると、令和5年も心不全が、不整脈及び伝導障害を上回った。



(9) 脳梗塞は前年より0.8ポイント増加

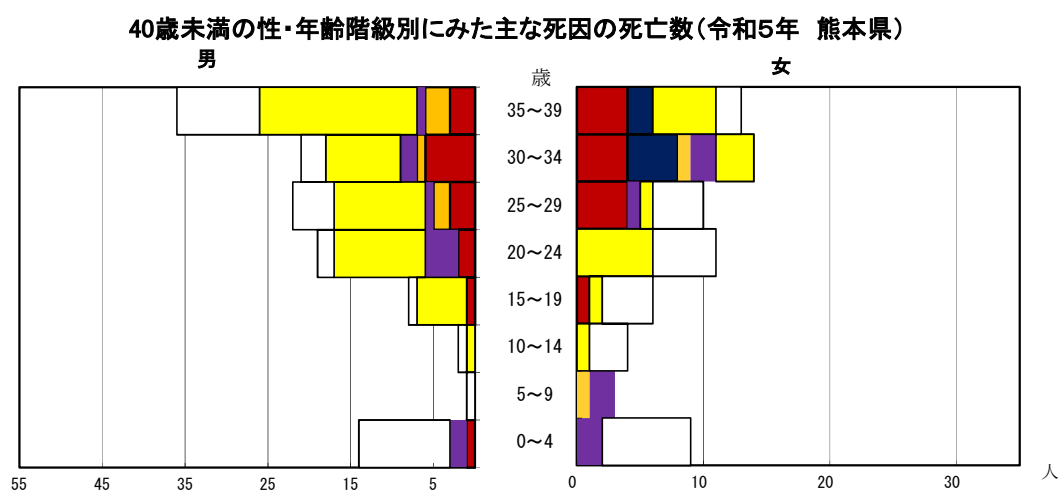
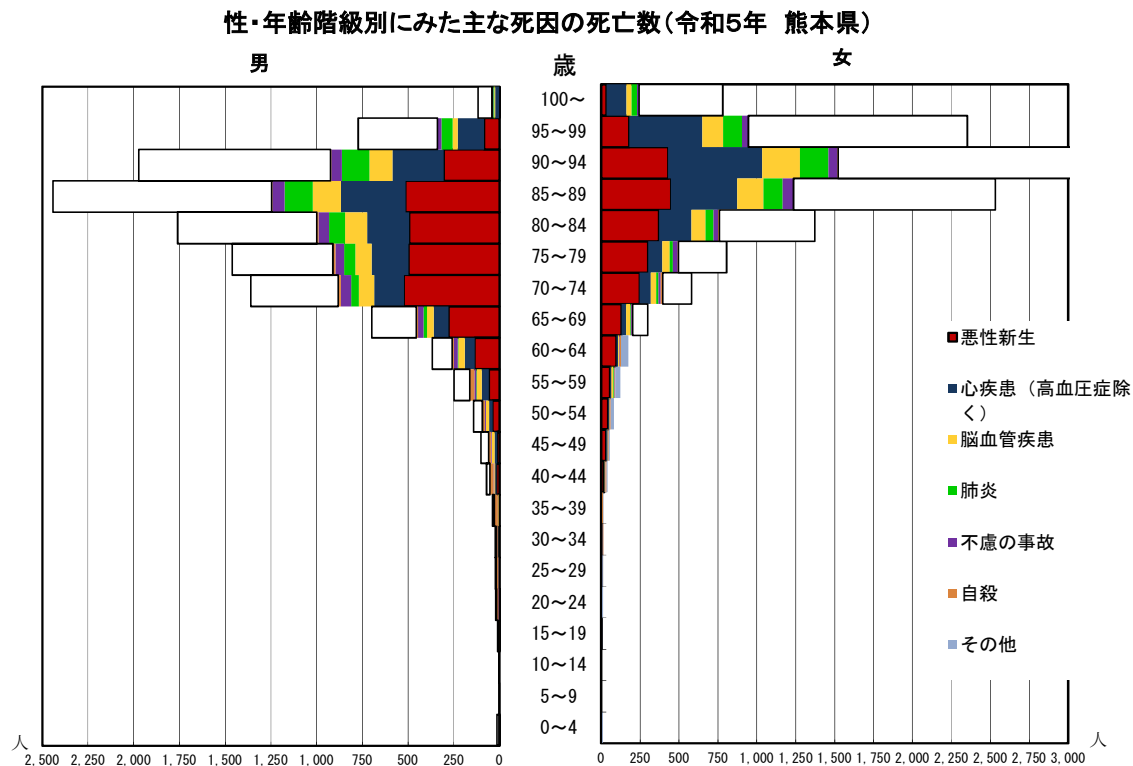
本県の脳血管疾患の種類別死亡率の年次推移をみると、令和5年は脳梗塞は前年より0.3ポイント減少、くも膜下出血は0.8ポイント増加、脳内出血も1.2ポイント増加、その他は減少している。



(10) 悪性新生物による死亡数は、男女とも85歳～89歳で最多

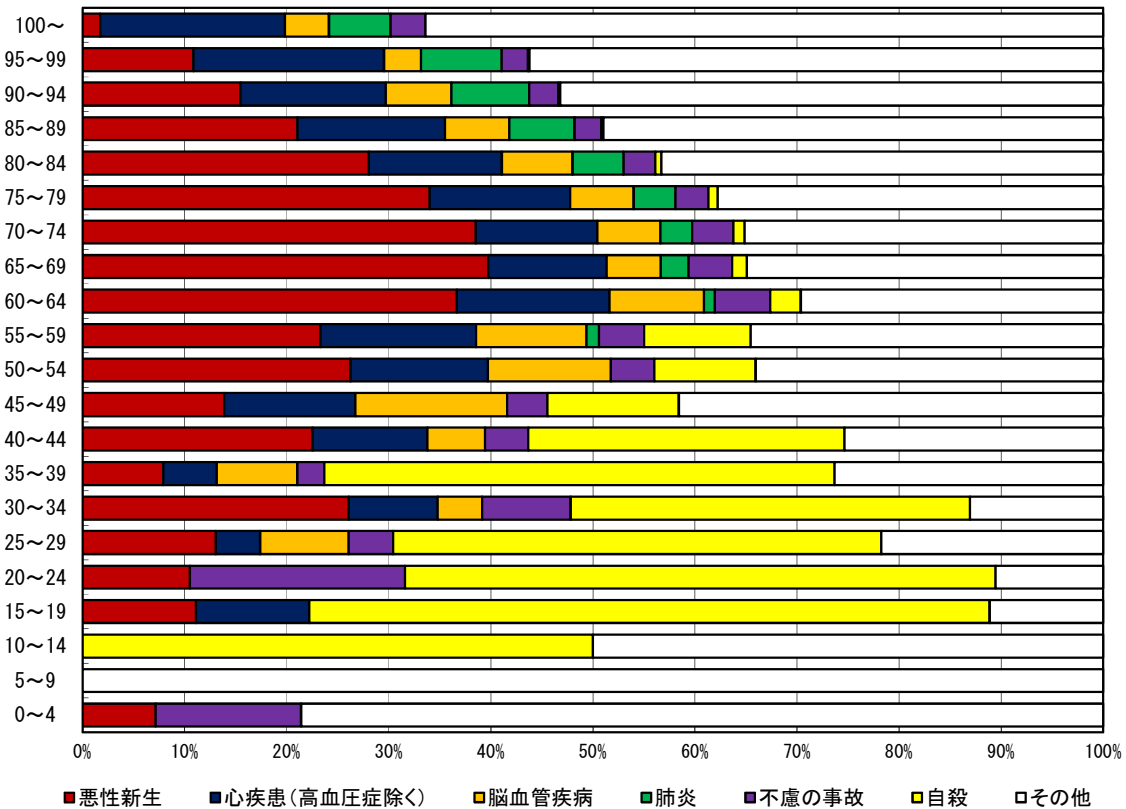
本県の令和5年の死亡数を主な死因別でみると、全体では男女とも1位悪性新生物、2位心疾患であるが、年齢階級別でみると、その構成は階級毎に大きく異なる。

また、39歳以下においては、男性の死因の最多は自殺の57人、次いでその他の34人、女性の死因の最多はその他の25人、次いで自殺が17人であった。

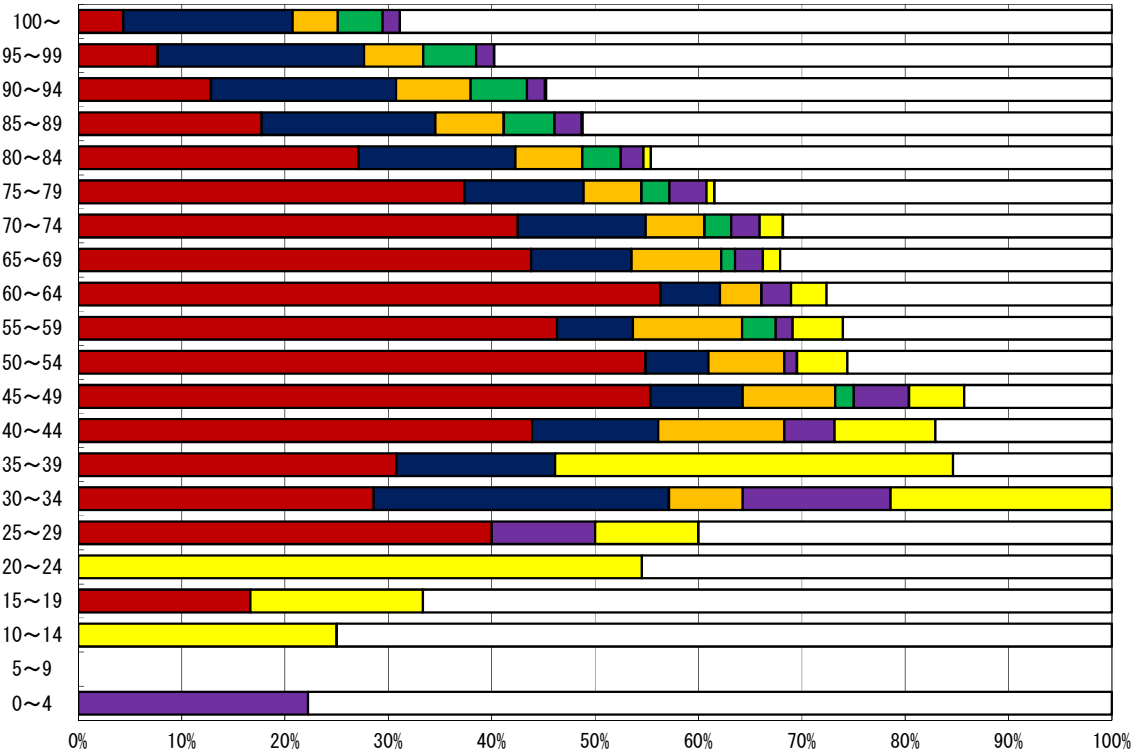


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

性・年齢階級別にみた主な死因の構成割合（令和5年 熊本県・男）

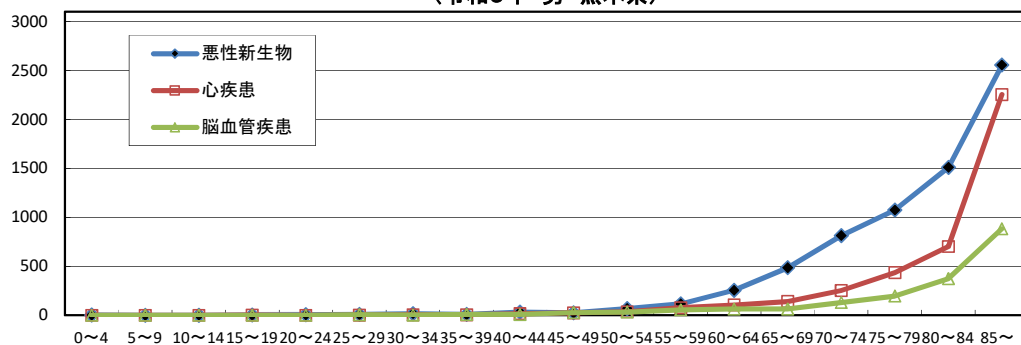


性・年齢階級別にみた主な死因の構成割合（令和5年 熊本県・女）



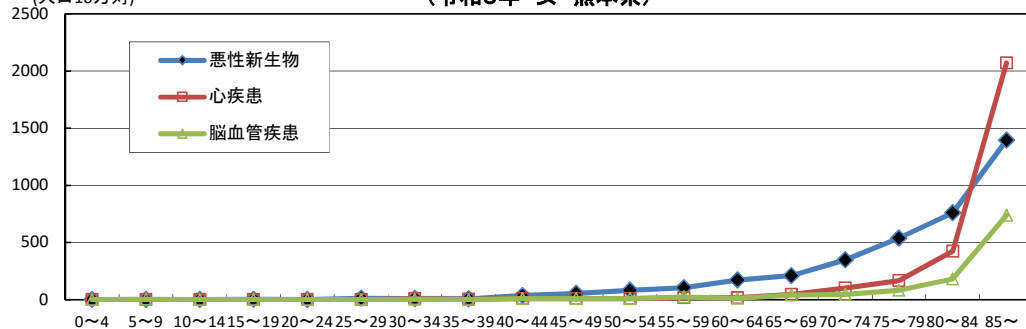
死亡率
(人口10万対)

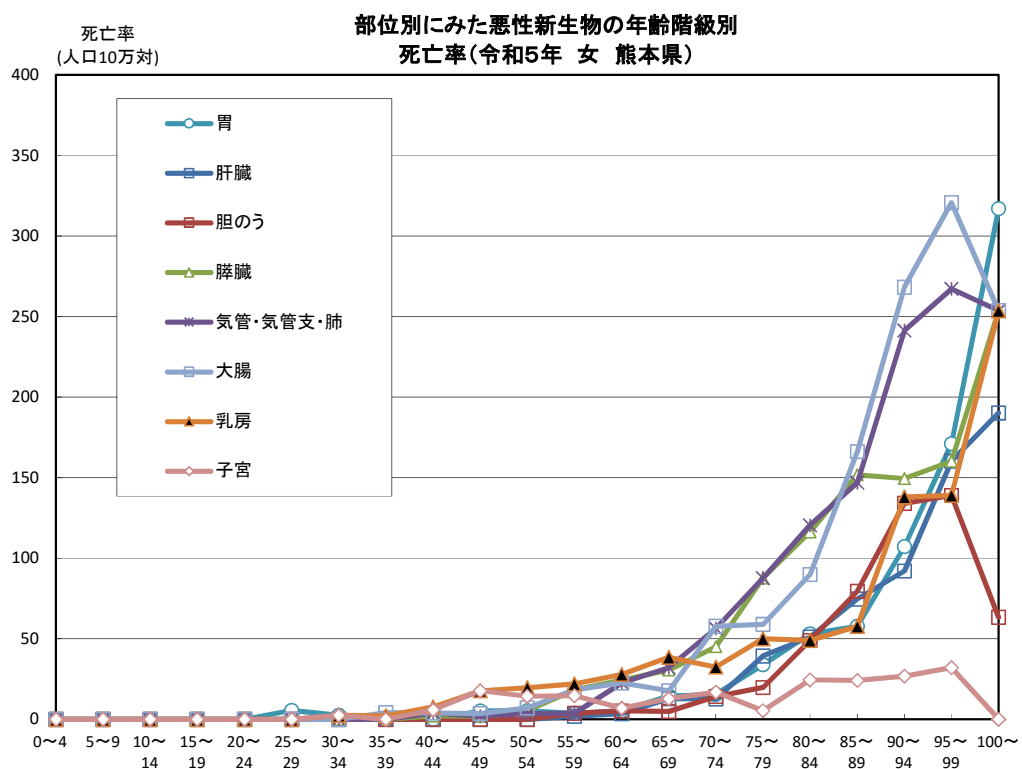
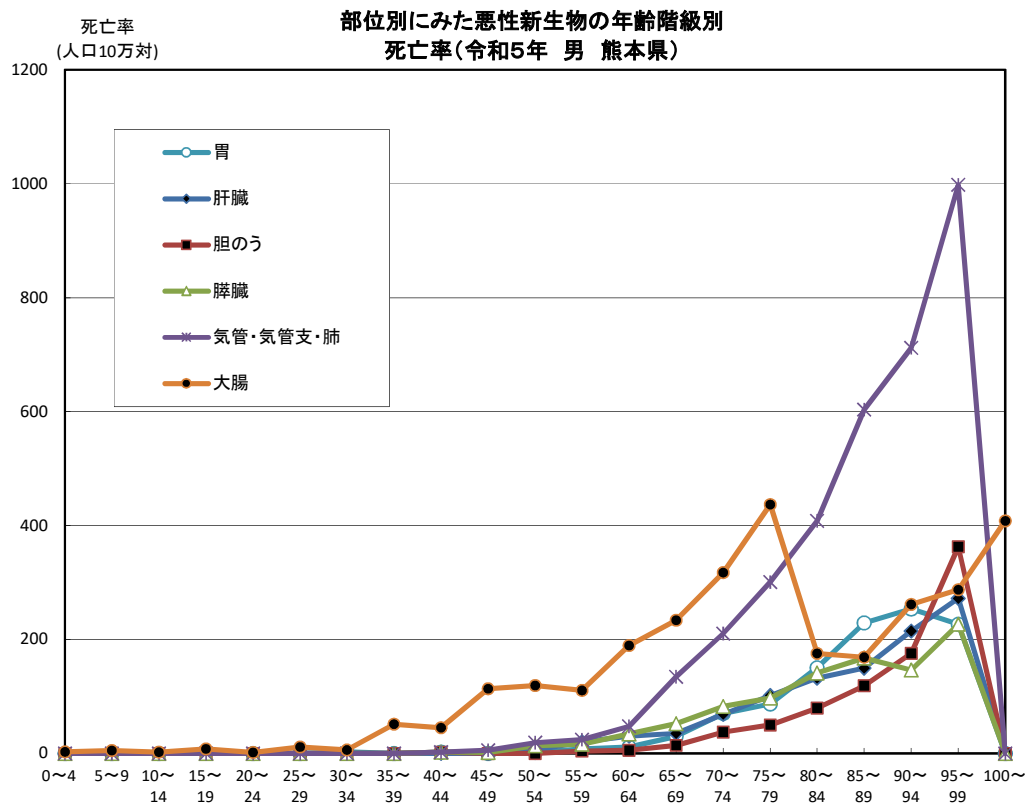
3大死因の年齢階級別死亡率 (令和5年 男 熊本県)



死亡率
(人口10万対)

3大死因の年齢階級別死亡率 (令和5年 女 熊本県)



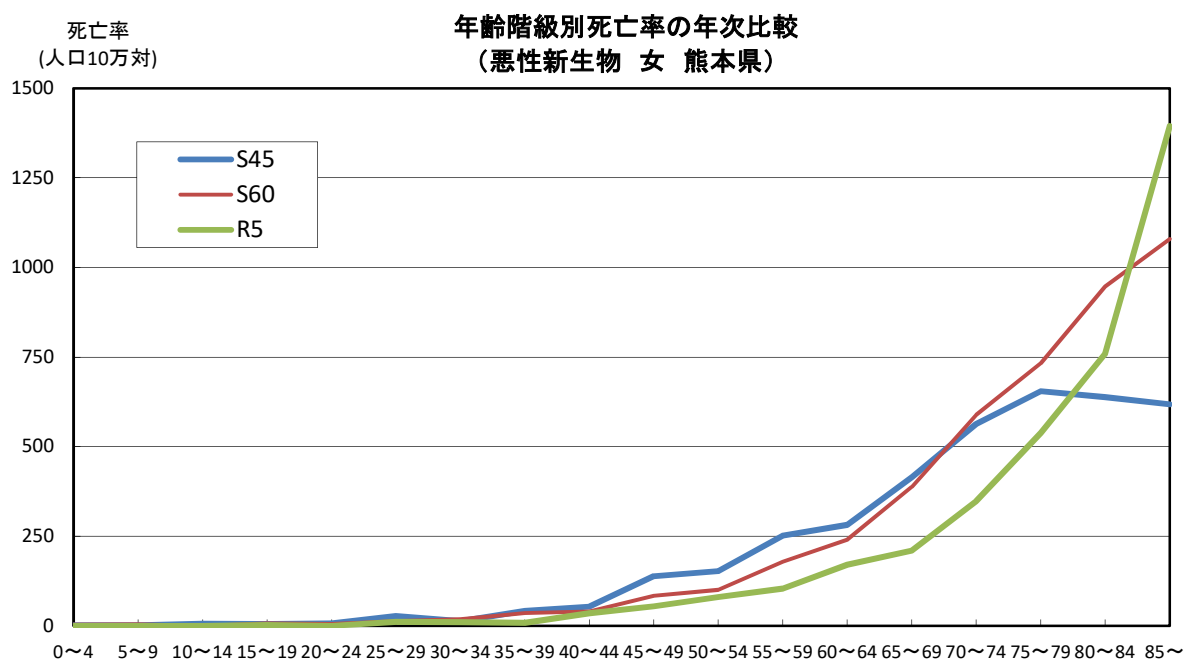
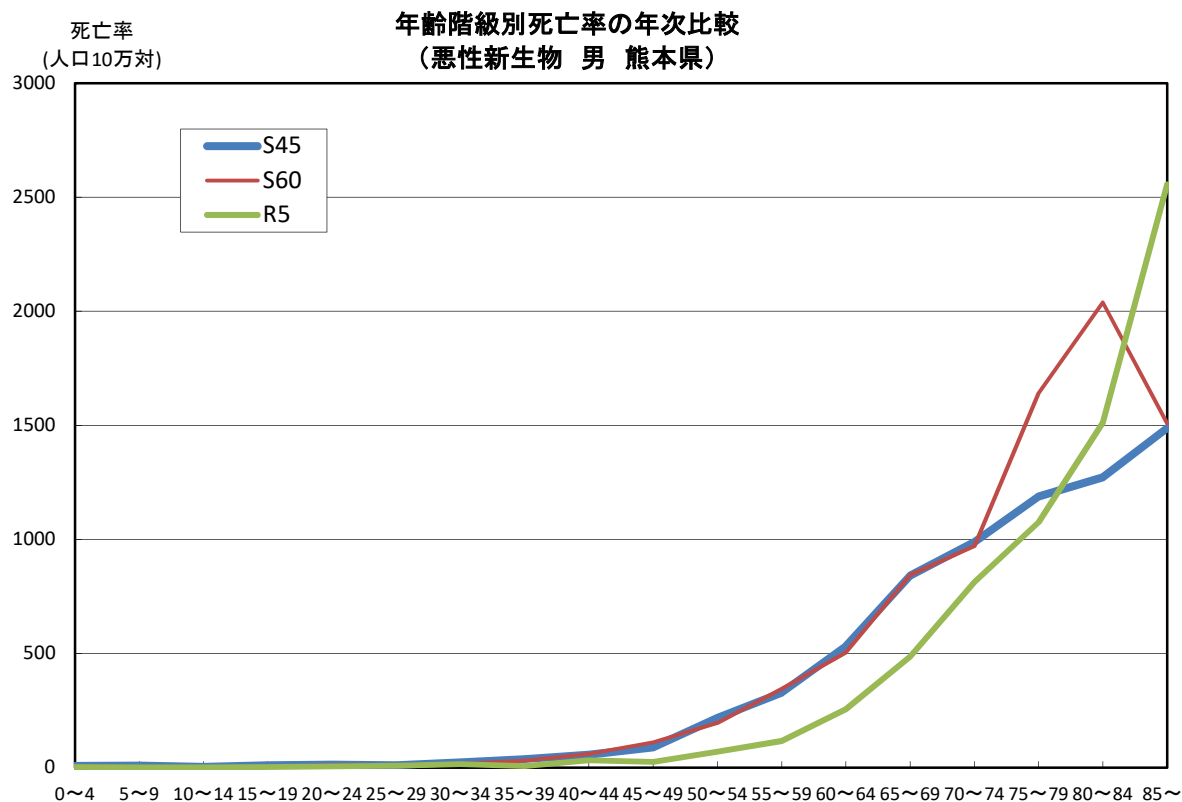


(11) 昭和45年、昭和60年と比較すると心疾患、脳血管疾患は減少、悪性新生物は85歳以上で増加

3大死因の年齢階級別死亡率（人口10万対）を年次別（昭和45年、昭和60年、令和5年）にみると、令和5年の悪性新生物は男女とも85歳以上で大幅に上昇している。

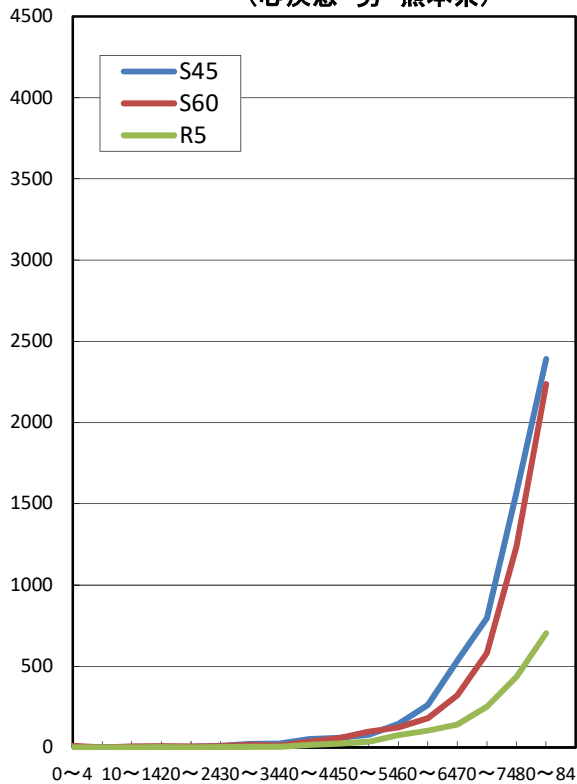
心疾患、脳血管疾患は年次別にみると各年齢層とも大幅に低下している。

なお、心疾患の減少については、平成7年に行われた死因分類及び死亡診断書の改正の影響によるところが大きいと考えられる。

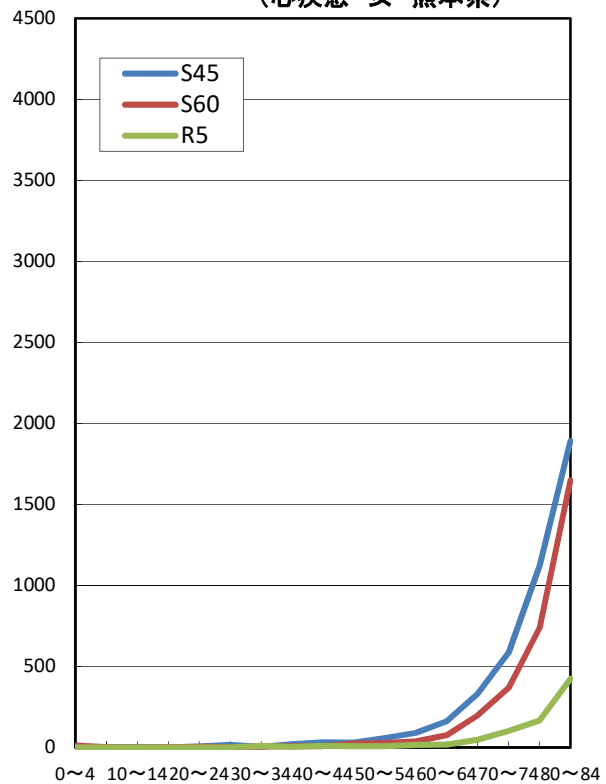


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

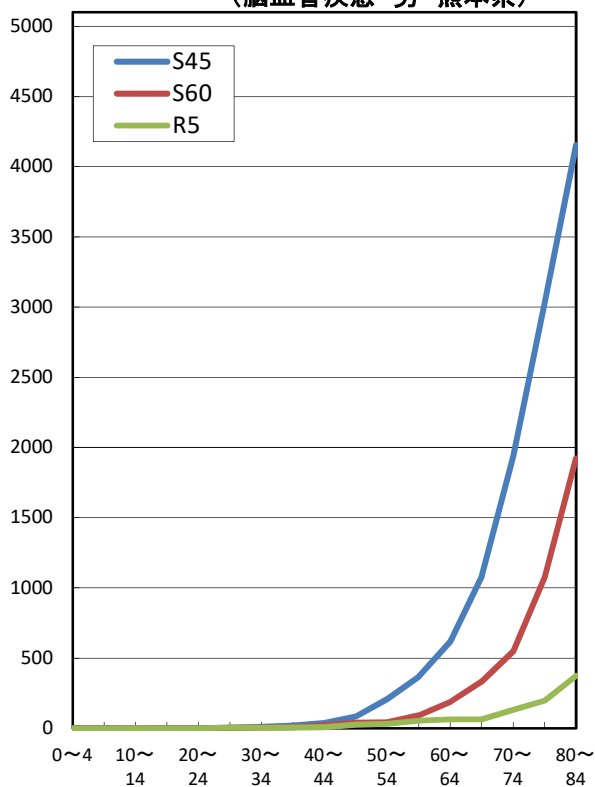
死亡率
(人口10万対) 年齢階級別死亡率の年次比較
(心疾患 男 熊本県)



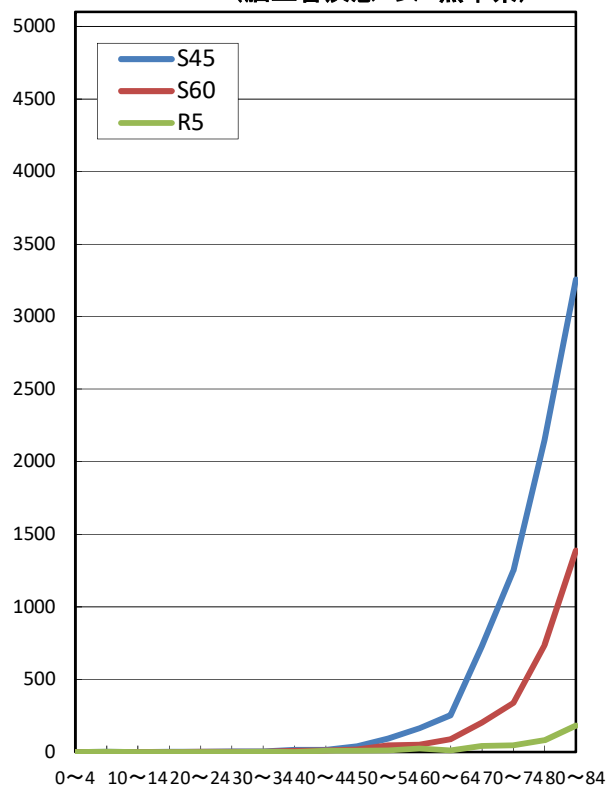
死亡率
(人口10万対) 年齢階級別死亡率の年次比較
(心疾患 女 熊本県)



死亡率
(人口10万対) 年齢階級別死亡率の年次比較
(脳血管疾患 男 熊本県)



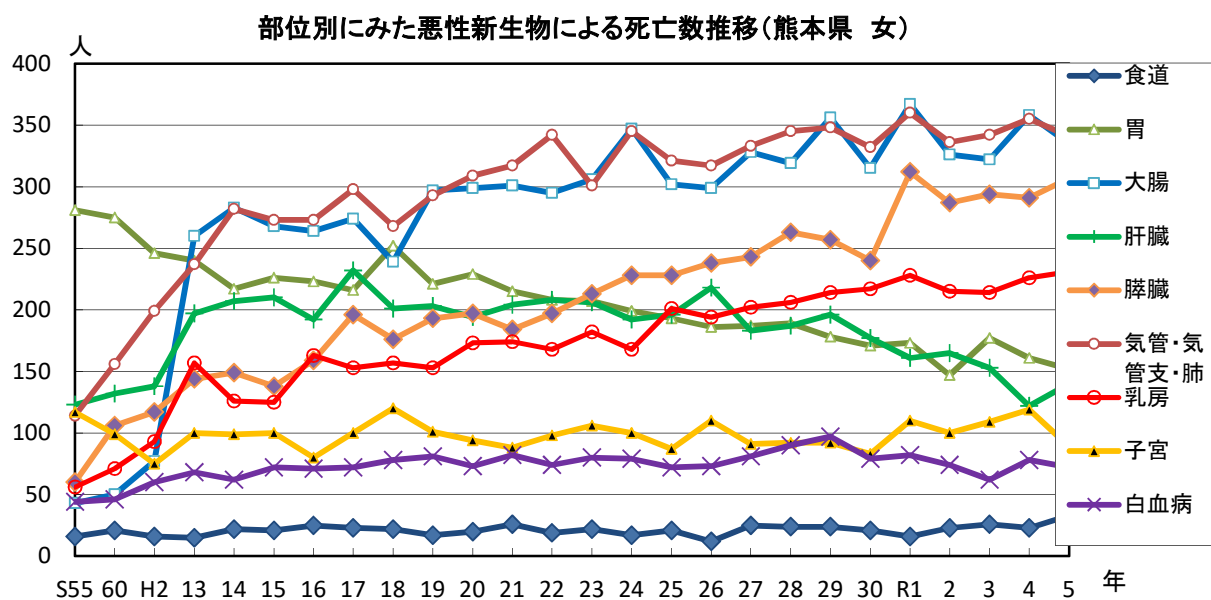
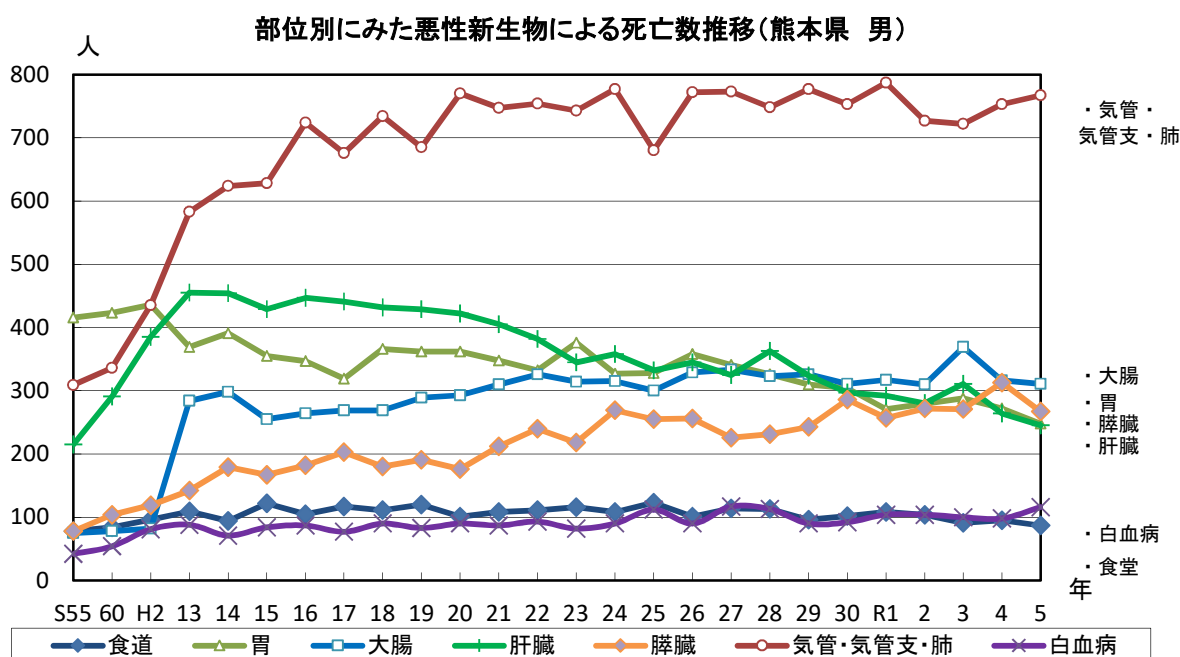
死亡率
(人口10万対) 年齢階級別死亡率の年次比較
(脳血管疾患 女 熊本県)



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

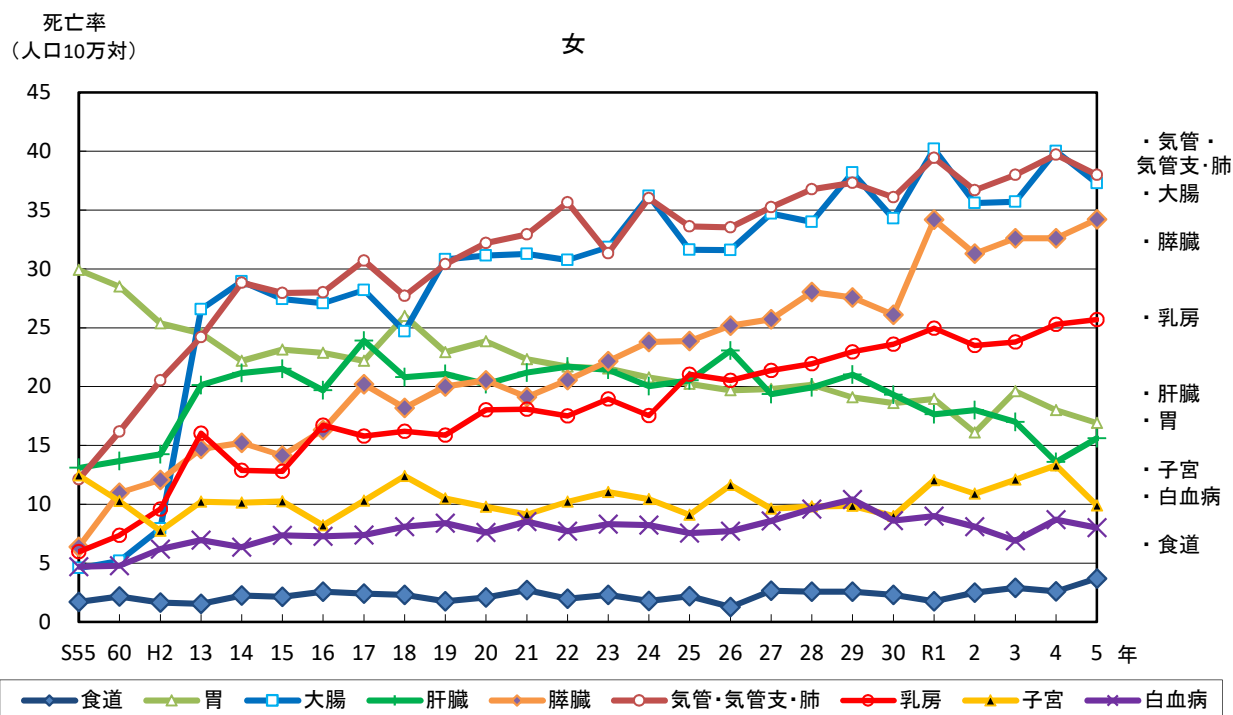
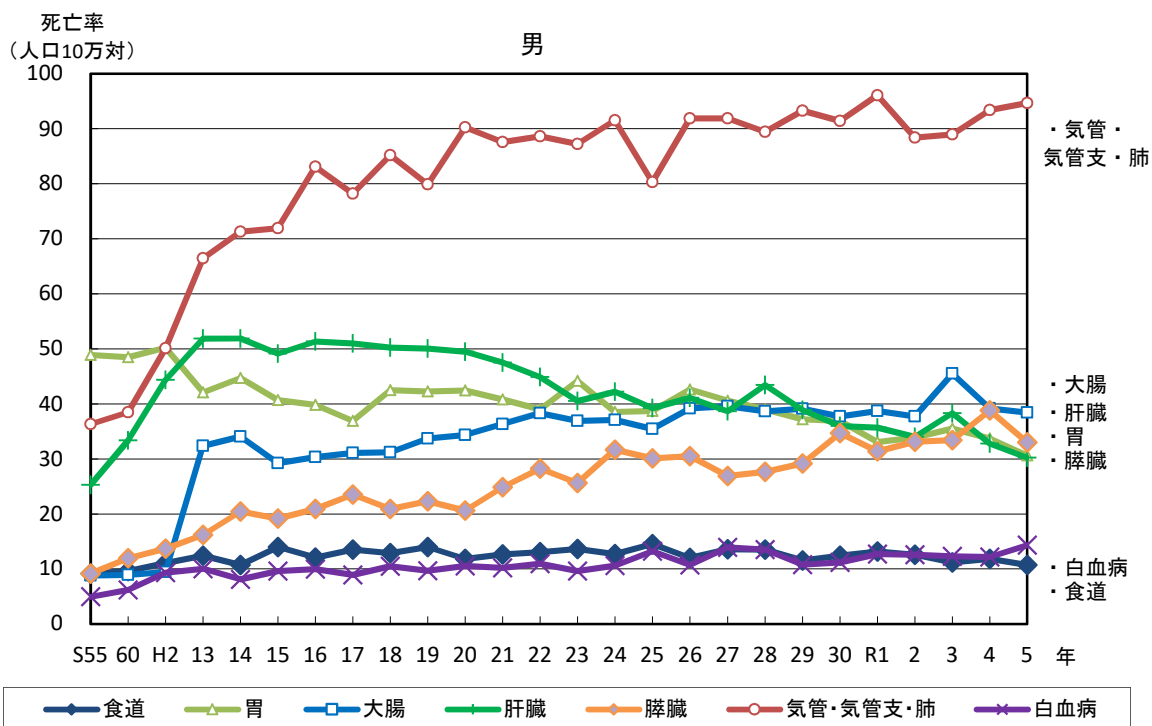
(12) 男性は気管・気管支・肺がんが最多、女性は大腸がんが最多（部位別）

本県の悪性新生物の部位別の死亡数を年次推移でみると、近年、男性は気管・気管支・肺がんが最多である。女性の令和5年は、大腸がんが最多だった。



資料) 厚生労働省「人口動態統計」

部位別にみた悪性新生物による死亡率の推移(熊本県)

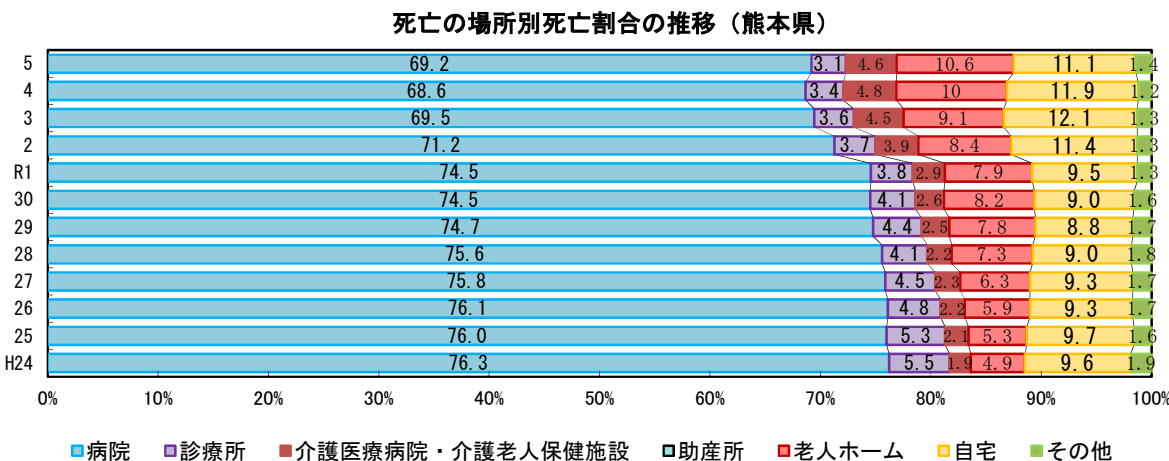


資料) 厚生労働省「人口動態統計」

(13) 医療機関での死亡は72.3%

死亡の場所別死亡割合の年次推移をみると、「病院」における死亡は、令和5年は69.2%で前年より0.6ポイント増加し、「自宅」における死亡は11.1%で前年から0.8ポイントの減少となった。

また、令和5年の「介護医療院・介護老人保健施設」（※平成30年から介護医療院が追加）における死亡は4.6%で前年より0.2ポイント減少、平成7年から死亡場所の分類に追加された「老人ホーム」は10.6%で、前年より0.6ポイント増加となった。



資料）厚生労働省「人口動態統計」

(14) 高齢者の家庭における不慮の事故は、「転倒・転落」が164人で最多

家庭における不慮の事故の種類別にみた65歳以上の死亡者数をみると、令和5年は転倒・転落によるものが164人、その他の不慮の窒息によるものが130人、不慮の溺死及び溺水によるものが112人であった。

家庭における不慮の事故の種類別にみた65歳以上の死亡者数

死因分類コード	死 因	65歳以上の死亡者数
V01-X59	不慮の事故 ※	594
W00-W19	転倒・転落	164
W01	スリップ、つまずき及びよろめきによる同一平面上での転倒	140
W10	階段及びステップからの転倒及びその上での転倒	7
W13	建物又は建造物からの転落	3
W65-W74	不慮の溺死及び溺水	112
W65	浴槽内での溺死及び溺水	79
W66	浴槽内への転落による溺死及び溺水	2
W75-W84	その他の不慮の窒息	130
W78	胃内容物の誤嚥	20
W79	気管支閉塞を生じた食物の誤嚥	62
W80	気管支閉塞を生じたその他の物体の誤嚥	39
X00-X09	煙、火及び火災への暴露	23
X00	建物又は建造物内の管理されていない火への暴露	10
X05-X06	夜着及びその他の着衣及び衣服の発火又は溶解への暴露	-

注） ※家庭における不慮の事故以外の不慮の事故を含む。

資料） 厚生労働省「人口動態統計」